

2024年8月25日 説教「信じますか」

使徒の働き 26章 19～32節

アグリッパ王の前で、パウロは弁明を始めました。それは事実上の伝道説教でありました。彼がクリスチャンへの迫害を加えダマスコに向かう途上で、イエスと出会った出来事はその白眉でした。

1. 天からの啓示 (19～23節)

①天からの啓示にそむかず (19～20)「こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えてきたのです。」

アグリッパ王に語ってきたことのまとめに入ります。パウロはダマスコ途上の出来事を天からの啓示と確信していました。そして、それ以来はユダヤ人はもとより異邦人にも、悔改めにふさわしい行動をするように宣教をしてきたと証します。

②殺そうとしたのです (1)「そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕らえ、殺そうとしたのです。」

しかし、ユダヤ人たちはパウロの信仰と活動を問題にし、彼を宮の中で捕らえて、殺害しようとしたと伝えました。

③堅く立ってあかしを (22～23)「こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしているのです。そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民と異邦人とに最初に光を宣べ伝える、ということです。」

パウロのこれまでの伝道姿勢は、神にあった堅く立ち、人を区別をせずに語るということでした。そして、キリストの十字架と復活の出来事は、旧約の律法や預言書において、教えられ、預言されてきたことに符号していると明言しました。またそれは、まさに光の宣教だったといえます。

2. アグリッパ王に信仰を迫る (24～29節)

①まじめな真理の言葉を (24～25)「パウロがこのように弁明しているに、と、フェストが大声で、『気が狂っているぞ。パウロ。博学があなたの気を狂わせている』と言った。するとパウロは次のように言った。『フェスト閣下。気は狂っておりません。私は、まじめな真理のことばを話しています。』」

パウロの弁明はフェスト総督の知識や経験からは理解しにくいものだったのでしょう。総督はパウロの話をさえぎるような大声で「博学が気を狂わせている!」と叫びました。それに対しパウロは落ち着いて、自分が語っているとは真理の言葉であると伝えました。



②預言者を信じていますか (26~27) 「『王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対して私は率直に申し上げているのです。これらのことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも王の目に留まらなかったものはないと信じます。アグリッパ王。あなたは預言者を信じておられますか。もちろん信じておられると思います。』」

パウロは改めて、アグリッパに顔を向け、聖書に精通している相手に語ります。そして、パウロの語ることが旧約聖書から外れていないことを確認します。その上で、「あなたは預言者を信じていますか」と問います。もし、信じるというならば、パウロの語っているイエス・キリストについても、信じることにつながっていくからです。

③クリスチャンを迫害して (28~29) 「するとアグリッパ王はパウロに、『あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。』』と言った。パウロはこう答えた。『ことばが少なからうと、多かろうと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別にして、私のようになってくれることです。』」

パウロの信仰の勧めに対して、アグリッパはわずかな言葉でクリスチャンにしようとしている、とかわしました。するとパウロは、言葉の多少ではなく、アグリッパ王を始めとした多くの人々が、キリストを信じて救いの恵みにあずかるように願っていることを伝え、信仰を勧めたのです。

3. アグリッパ王の感想 (30~32 節)

①王、総督たちの退席 (30) 「ここで王と総督とベルニケ、および同席の人々が立ち上がった。」

そこまでで、アグリッパ王と妹のベルニケ、総督のフェスト、またそこにいた人々は席を立ちました。アグリッパとフェスト以外の人々がパウロの伝道説教に、どのような感想を持ったかはわかりません。

②あの人は死刑にあたらぬ (31) 「彼らは退場してから、互いに話し合って言った。『あの人は、死や投獄に相当することは何もしていない。』」

場所を離れた所で、彼らは異口同音に言ったのです。「あのパウロという男について、ユダヤ人は死刑を求めているが、それに値するような罪は認められないな」。それが彼らの反応でした。

③上訴しなかったら釈放 (32) 「またアグリッパはフェストに、『この人は、もしカイザルに上訴しなかったら、釈放されたであろうに』』と言った。」

アグリッパ王は信仰のことには触れず、フェストに「あの人は皇帝に上訴したということだが、そんなことをしなければ、今ごろは釈放されているのに」と語りました。しかし、それが主の御心でありました。

《結論》

パウロがこの聖書箇所において、アグリッパ王に伝道説教を行い、本気にクリスチャンになってもらおうとしています。フェスト総督には理解しにくい面があったとしても、アグリッパはユダヤ人の血を引いていますので、旧約聖書に基づいて、キリストの十字架と復活の福音を伝えたのです。そして、「預言者を信じていますか。もちろん信じておられると思います。」と言って信仰を迫っています。もちろん、これはキリスト信仰の勧めです。そのことは、アグリッパが「あなたはわずかな言葉で、私をクリスチャンにしようとしている」という言葉で明らかです。アグリッパは語られた福音の内容を理解していたのです。

ところで、信ずるというのはどういうことですか。これはたとえですが、向こうに希望の島が見えています。そこに渡るために、舟が用意されて、これに乗っていきなさいと伝えられているとします。そこにいたとして、あなたは躊躇するでしょう。なぜでしょう。それはこの舟は安全なのか。船頭さんは信頼できるのか。それに海がいつ荒れるかもわからないではないか。などと心配になるのです。それに希望の島といっても、本当に希望がそこにあるのかもわからないし、とても舟に乗る気にはなりませんというかもしれません。でも中には、希望の島にあこがれて、その舟のことも、船頭さんも、海が荒れるかどうか、すべて信頼して乗り込んで、向こうの島に向かう人があるでしょう。信じるというのは、概念ではなくて、具体的に舟に乗っていくことです。そうしなければ、希望の島には行けないのです。

今ここで、パウロはダマスコ途上でキリストと出会い、そこで示されたことを「天からの啓示」という表現をしています。そして、それは具体的にはキリストは、人間を罪から救い出してくださる主であり、復活された希望の主であることを証しました。さきほどのたとえでいえば、主は希望の島の主です。そして、パウロはここで、「気が狂っている」とフェストから言われましたが、「もし私たちが、気が狂っているとすれば、それはただ神のためである」(Ⅱコリント 5:13)とあるように、彼はキリストを伝えることに命をかけたのです。彼は主にたどり着かせるための船頭になったといえます。キリストの宣教者に導かれたことも、彼は証しています。もちろん、船頭はあくまでも舟のこぎ手です。その小さな舟を守り、荒波をもこえさせてくださる方はキリストです。

聖歌 508「うきよのかぜと、波にもまれて、ふながかりせる、小舟にとりて、強きいかりぞ、ただ頼みなる、罪の嵐はいかに吹くとも、岩なるイエスに、いかりおろせばながさることなし」この聖歌には、この世の様々な風、波がある中を、小舟にとって船出しても、不動の岩であるキリストが強い錨のようになってくださるから、罪の嵐がふくなかでも、流されるとはありません、とあります。

アグリッパ王は信仰の決断から逃げました。それでは、あなたはどうしますか。いまだキリストを信じる決断をしていないあなたは、キリストを信じますか。またすでにキリストを信じている方は、小舟で御国への道を進むのに、岩である主イエスに改めてお頼りする決意がありますか。この方にお頼りして、真の希望と愛をいただいでいきましょう。